

朱子語類讀書法篇譯注(五)

興膳宏 京都大學

木津祐子 同志社女子大學

齋藤希史 京都大學

62 看書、不可將自己見硬參入去。須是除了自己所見、看他册子上古人意思如何。如程先生解「直方大」、乃引孟子、雖是程先生言、畢竟迫切。節。

書物を読むときに、自分の考えを無理に持ちこんではいけない。自分の考えはにおいて、その書物の中で古人の考えがどうかを見るのだ。程先生が「直方大」を解するのに、なんと『孟子』を引いておられるのなどは、程先生の言ではあるが、やはり性急だ。甘節記す

(注) 「直方大」は、『易』坤「六二、直方大、不習无不利也。

象曰、六二之動、直以方也」のこと。それに對する程伊川の解とは、『周易程氏傳』卷一で、「直方大、孟子所謂至大至剛以直也。在坤體、故以方易剛、猶貞加牝馬也」とあるように、『孟子』公孫丑上の「至大至剛以直」と『易』とを結びつける考えをいう。この程伊川の解釋を論ずる箇所は、『語類』「孟子二公孫丑上之上」(五二・1249)にもみえる。

「迫切」は、性急であること。上篇30條に既出。

63 看文字先有意見、恐只是私意。謂如粗厲者觀書、必以勇果強毅爲主、柔善者觀書、必以慈祥寬厚爲主。書中何所不有。人傑。

文章を読むのに先入観があると、恣意的な読みになってしまう。つまり、氣の荒い者が書物を読めば、きつと勇猛果敢を中心にするであろうし、氣の優しい者が読めば、きつと慈愛寛大を中心にするであろう。書物の中には何でもあるのだから。萬人傑記す

(注) 「粗厲」はおおざっぱで荒っぽいこと。「毅父問遠暴慢章。曰、此章暴慢・鄙倍等字、須要與他看。暴、是粗厲。慢、是放肆。蓋人之容貌少得和平、不暴則慢。暴是剛者之過、慢是寬柔者之過」(『論語』泰伯篇「三五・913」)

「柔善」という語からは、『論語』季氏篇の「益者三友、損

者三友。友直、友諒、友多聞、益矣。友便辟、友善柔、友便佞、損矣」が思い起こされるが、本條は、そこで述べられるような、反價値的な意味で用いられているのではあるまい。

64 凡讀書、先須曉得他底言詞了、然後看其說於理當否。當於理則是、背於理則非。今人多是心下先有一箇意思了、却將他人說話來說自家底意思。其有不合者、則硬穿鑿之使合。廣。

書物を読むには、まずそのことばを理解してから、その説が理に適っているかどうかを見るのだ。理に適っていれば正しく、背いていけば間違いだ。今の人はある考えを先に抱いて、他人の言っていることで自分の考えを説こうとしがちだ。うまく考えにそぐわないと、無理にこじつけて合わせようとす。輔廣記す

(注) 「心下」は心中・胸中に同じ。「若心下有些子不安穩、便不做。到得更有一項心下習熟底事、却自以爲安。外來卒未相入底、却又不安」(學三 論知行)九・156  
『朱子讀書法』卷二「虚心涵泳」に「今人」以下と同趣旨の文が見える。「今人讀書、多是心下先有箇意思了、却將聖賢言語來湊他意思。其有不合、則硬穿鑿之使合。」

朱子語類讀書法篇譯注(田)(興膳・木津・齋藤)

65 學者不可用己意遷就聖賢之言。德明。  
學ぶ者は、自分の考えで聖賢の言を折り合わせてはいけない。廖德明記す

(校勘) 朝鮮古寫本 缺  
(注) 「遷就」は、迎合すること。早く漢の賈誼「治安策」  
『漢書』四八賈誼傳に用例が見える。  
(記録者) 廖德明 字は子晦、南劍州順昌縣の人。『師事年放』181。

66 讀書、如問人事一般。欲知彼事、須問彼人。今却不問其人、只以己意料度、謂必是如此。揚。

書物を読むのは世事を問うのと同じだ。あることを知ろうとするなら、當事者に聞くべきだ。近頃の人はその人に聞かずに、自分の考えでおしはかり、きっとそうに違いない、と思っている。包揚記す

(校勘) 朝鮮古寫本 缺  
(注) 「料度」は、推し量ること。「不須料度、他淺深、徒費心思也。」(論語二十二 先進篇下)四〇・1030

67 看人文字、不可隨聲遷就。我見得是處、方可信。須沈潛玩釋、方有見處。不然、人說沙可做飯、我也說沙可做飯、

如何可喫。謙。

人の文章を讀んでも、氣輕に折り合つてはいけない。自分で正しいと認めてこそ、信じられる。深く味わい考えをめぐらして、始めてわかるのだ。でなければ、人が砂もごはんになると言うのを、自分もそうできると言ってみたって、食べられるわけはあるまいが。廖謙記す

(注) 「隨聲」は、自らの定見をもたずに付和雷同することをいう。「隨聲附和」ともいう。

「沈潛玩繹」は、深く考え反芻することをいう。上篇49條の「抽繹」や同64條の「沈潛玩索」などと非常に近い意味のことば。

68 大凡讀書、不要般涉。但溫尋舊底不妨、不可將新底來攙。道夫。

およそ讀書するには、あれこれ目移りしてはいけない。古いものをじっくり讀みこむのはよいとして、新しいものに飛びついてはいけない。楊道夫記す

(注) 「般涉」は廣く漁ること。「讀書須純一、如看一般未了、又要般涉、都不濟事。」(「自論爲學工夫」一〇四・2611)  
「溫尋」はじっくり反芻すること。「只看近思錄、今日問箇、

明日復將來溫尋、子細熟看」(「訓門人三」一一五・2776)

「攙」は「搶」に通じ、飛びつく、先取りするという意。楊萬里の「小舟晚興」に「一船在後忽攙前、前後篙師各粲然」とある。

また、本條と同じ言が『朱子讀書法』卷三「循序漸進 每書誦讀考索之序」に見えるが、そこでは「攙」を「搶」に作っている。

69 文字不可硬說、但當習熟、漸漸分明。

文章は、無理にこじつけて解釋してはいけない。何度も讀んでじっくりくるようにすれば、徐々にわかってくるものだ。記録者名を缺く

70 凡看聖賢言語、不要迫得太緊。振。

聖賢の言葉を読むのに、急<sup>キ</sup>くのは禁物。吳振記す

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「迫」は、性急にことを進めようとするので、62條の「迫切」と同義。

(記録者) 吳振 字は子起。『師事年放續』284。

71 大凡看文字要急迫不得。有疑處、且漸漸思量。若一下便要理會得、也無此理。廣。

文章を讀むのに、急いではだめだ。疑問が生じれば、まずはゆっくりと考えること。讀んですぐにわかろうとしても、それは無理というものだ。輔廣記す

(注) 「急迫」は、上篇第23條の注を参照のこと。また、「大學三傳九章 釋家齊國治」(一六・339)にも「這箇道理、却急迫不得、待到他日數足處、自然通透」と見える。62條の「迫切」、70條の「迫」も同じ。

72 看文字、須是退步看、方可見得。若一向近前迫看、反爲所遮蔽、轉不見矣。力行。

文章を讀むには、退いて讀んでこそわかってくるものだ。ひたすら先へ先へと讀めば、かえって何も見えず、いつそうわからなくなってしまう。王力行記す

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「遮蔽」は下篇61條に既出。

「一向」は、下篇31條に既出。

73 學者觀書、病在只要向前、不肯退步看。愈向前、愈看得不分曉。不若退步、却看得審。大概病在執着、不肯放下。正如聽訟、心先有主張乙底意思、便只尋甲底不是、先有主

張甲底意思、便只見乙底不是。不若姑置甲乙之說、徐徐觀之、方能辨其曲直。橫渠云、「濯去舊見、以來新意」。此說甚當。若不濯去舊見、何處得新意來。今學者有二種病、一是主私意、一是舊有先入之說、雖欲擺脫、亦被他自來相尋。營。

學ぶ者が書物を讀む際の惡弊は、先に進もうとするばかりで、退いて讀もうとしないことだ。先に進もうとすればするほど、いよいよわからなくなる。それよりも、一步退く方がはっきりわかるものだ。だいたい、こだわって手放そうとしないのがよくない。ちょうど、裁判で、乙の言い分を通そうとする氣があれば、もっぱら甲の不正をさがそうとし、甲の言い分を通そうとする氣があれば、もっぱら乙の不正が目につくようなものだ。それよりも、甲と乙の言い分はしばらく置いて、ゆっくり見渡してこそ、その理非曲直が見わけられるようになる。橫渠先生は、「古い見識を洗い流し、新たな理解を得よ」と言われた。まったくその通りだ。古い見識を洗い流さなければ、どうして新たな理解が得られよう。いまの學ぶ者には二つの惡弊がある。

一つは自分の考えに固執すること、もう一つはもとからの先入観があることで、そこから抜け出そうとしても、つい引き寄せられてしまう。黄登記す

(校勘) 朝鮮古寫本 一是主私意↓一是主私意思

(注) 「執着」は、下篇61條に既出。

學問を訴訟にたとえる例は、しばしば見られるが、近くは下篇26條で、本條と同じく、先入見をぬぐい去り、言いつを虚心に聞いてから裁くことと讀書とを結びつける言が記録される。本條で引用される張載(横渠)の言は、『經學理窟』學大原下などに見える語。下篇32條の注を参照のこと。

なお、『朱子讀書法』卷四「虚心涵泳」には、本條と同じ言が見えるが、ちようど「正如聽訟」から「何處得新意來」までの訴訟のたとえの箇所が省略されている。

74 學者不可只管守從前所見。須除了、方見新意。如去了濁水、然後清者出焉。力行。

學ぶ者は、古い考えにしがみつけばかりではないけない。それを取り除いて、始めて新しい理解が生まれる。ちようど濁った水を流してから、清水が湧き出るようなものだ。

王力行記す

75 到理會不得處、便當「濯去舊見、以來新意」、仍且只就本文看之。伯羽。

わからないところに出くわしたら、「古い見識を洗い流し、新たな理解を得る」ようにして、そのまま本文に従って讀むこと。童伯羽記す

(校勘) 朝鮮古寫本 伯羽(記録者名)↓輩卿

(注) 「仍且」はそのまましばらく、の意。

76 某向時與朋友說讀書、也教他去思索、求所疑。近方見得、讀書只是且恁地虛心就上面熟讀、久之自有所得、亦自有疑處。蓋熟讀後、自有窒礙不通處、是自然有疑、方好較量。今若先去尋箇疑、便不得。又曰、這般也有時候。舊日看論語、合下便有疑。蓋自有一樣事、被諸先生說成數樣、所以便着疑。今却有集注了、且可傍本看教心熟。少間或有說不通處、自見得疑、只是今未可先去疑着。賀孫。

「わたしは、かつて友人と讀書の法を論じて、やはり深く考え疑問を探すようにせよ、といった。近頃わかってきたが、讀書は、とにかくこうして虚心に本文を熟讀するに盡きる。そのうちに、おのずと納得するところもあるし、

疑問も出てくるものだ。熟讀すれば、つかえて通じない所が出てきて、おのずと疑いも生じるので、それでこそじっくり考えられる。疑問をあさりまわるようではだめだ。」  
またいわれた。「こういうやり方にも時機がある。昔は、『論語』を讀んでいた時、すぐに疑問が生じた。というのも、一つの事柄を、諸先生がいろいろに解いておられるために、疑問が生じたわけだ。いまはわたしの『集注』があるので、まずは本文に従ってじっくり讀んでいけばよい。

いずれ説明のつかないところが出てきて、自然と疑問がわいて来るものだから、はじめから疑おうとしてはいけない。」葉賀孫記す

(注) 「向時」はかつての意。「一則向時、看與如今看、明晦便不同」(學三 論知行)九・154)の用例が見える。

「也」は、現代語の「還是」に同じく、ここでは轉折の語氣を傳える。

「窒礙」はつかえ滞ること。下篇59條の注を参照のこと。

「較量」はつきつめて考えること。「好底是天理、不好底是人欲。然須是較量、所以好處、如何樣做方好、始得」(訓門人五)一一七・2824)

「台下」は當初の意。上篇2條の注を参照のこと。

朱子語類讀書法篇譯注(田)(興膳・木津・齋藤)

「疑着」は疑いを抱くこと。「着」はもつ、抱くということ。『語類』での用例は即座に見出し難いが、『初刻拍案驚奇』卷二〇に「元普心下着疑、想道、我那裏來這樣遠親」とある。この條から80條までは、學問の上で疑問にめぐ合うことがいかに大切かを述べる。朱子は、疑問を解決していくことによつて少しづつ道理に近づくことができる、と考えていた。

「讀書只是且恁地虛心就上面熟讀、久之自有所得、亦自有疑處」と同趣旨の言が、『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に要約された形で次のように見える。「讀書須虛心熟讀、久之自有所得、亦自有所疑、今先尋討箇疑便不是。」

77 看文字、且自用工夫、先已切至、方可舉所疑、與朋友講論。假無朋友、久之自能自見得。蓋蓄積多者忽然爆開、便自然通、此所謂「何天之衢亨」也。蓋「蓄極則通」、須是蓄之極、則通。譬。人傑錄云、讀書須是先看一件了、然後再看一件。若是蓄積處多、忽然爆開來時、自然所得者大。易所謂「何天之衢亨」、是也。

文章を讀むには、ともかく自分で努力して、しつくりくるまで切實なものにしてこそ、疑わしいところを取り上げて、友人と議論することができる。かりに友人がいなくても、いずれおのずとわかってくるものだ。多く蓄積してき

たものが、ある時ふとはじければ、おのずと通ずるのであり、これがいわゆる「何ぞ天の衢みちの亨とおる」ということだ。

「蓄極まれば則ち通ず」というように、蓄積が極まれば通ずるのだ。黄營記す。萬人傑の記録にいう、「讀書はまず一つを讀み終わってから次に移ること。蓄積が多くなれば、ふとそれははじけた時に、得るものもおのずから大きい。易に「何ぞ天の衢の亨る」というのが、このことなのだ。

(校勘) 朝鮮古寫本 自能自見得↓亦能自見得 蓋蓄積多者↓蓋蓄積者多 人傑錄云↓按萬人傑錄同而略、今付云

(注) 「爆開」は、突然はじける、また發生することをいう。「陽氣伏於陰氣之内不得出、故爆開而爲雷也」(張子書二) 九  
九・2536)

「何天之衢亨」は『易』大畜六五の「象曰、六五之吉、有慶也、上九、何天之衢、亨」(注に「處畜之極、畜極則通。大畜以至於大亨之時、何辭也。何畜乃天之衢亨」)を踏まえる。

「切至」は、漢代以來多くの用例があるが、そもそも「切實」と音も意味も近い語。適切でびったりしていることをいう。

78 讀書無疑者、須教有疑。有疑者、却要無疑、到這裏方是長進。道夫。

讀書して、疑問がなければ、疑問がわいてくるようにす

る。疑問が出てくれば、今度は疑問がないようにする。そこまで至ってこそ、大きく進歩することができる。楊道夫記す

(注) 「長進」は、上篇15條に既出。

79 問、看理多有疑處。如百氏之言、或疑其爲非、又疑其爲是、當如何斷之。曰、不可強斷、姑置之可也。人傑。

問う、「理を説く書を読んでよく疑問がわいてきます。諸子百家のことなどは、間違いではないかと思ふこともあれば、正しいかと思ふこともあります。どのように判断すればよろしいでしょう。」おっしゃった、「無理に判断するな。そのままにしておけばよい。」萬人傑記す

(注) 「看理」は、單に「理を見る、讀む」ことではなく、下に諸子百家の例が挙げられていることから、「理を説く書物」という語を補って譯した。

「百氏」は、諸子百家を指す。用例は古く、『漢書』敘傳下に「緯六經、綴道綱、總百氏、贊篇章」と見える。

80 人之病、只知他人之說可疑、而不知己說之可疑。試以詰難他人者以自詰難、庶幾自見得失。必大。

人の悪弊は、ただ他人の説を疑わしいと思うばかりで、自分の説を疑わしいとは思わないことだ。ためしに他人への批判を自分に向けてみれば、正しいところと間違っているところがおのずとわかるものだ。吳必大記す

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

81 因求講學言論傳之、答曰、聖賢之言、明如日月。又曰、人有欲速之病。舊嘗與一人讀詩集、每略過題一行。不看題目、却成甚讀詩也。又嘗龔實之輜中只着一冊文字看、此其專靜也。且云、尋常出外、輜中着三四冊書、看一冊厭、又看一冊、此是甚功夫也。方。

ついでに講學や議論のあり方を傳授くださるよう求める  
と、おっしゃった。「聖賢のことばは、日月のように明らかなものだ」。またいわれた、「人にはせっかちにわかつろうとする悪弊がある。昔、ある人と詩集を讀んでいたとき、その人は、いつも題目の行をいい加減にとぼして讀んだ。題目を讀まずに、詩を讀むもないものだ。それから、龔實之が輜の中でひたすら一冊の書物に讀みふけているのを

朱子語類讀書法篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

見たことがあるが、これこそ専念し集中するということだ。そして、『ふだん出かける時に、三四冊の書物を輜の中に持ち込んで、一冊に讀み飽きたら次の一冊と讀んでいくのは、努力もへちまもあるまい』、と書いていた。」楊方記す

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

朝鮮刊本 不看題目↓不看題目 甚功夫也↓甚二夫也

(注) 「專靜」は、下篇8條に既出。

「詩集」とあるのが、『詩經』なのか集部の詩集なのか、具體的に何を指すのかは不明。

龔實之は、名は茂良、實之は字である。興化軍の人。『宋史』卷三六五に傳が見え、そこには、しばしば朱子を任用するよう奏上したことが記される。以下に抄出する。

茂良奏、朱熹操行耿介、婁召不起、宜蒙錄用。群小乘間讒毀、未幾、手詔付茂良、謂、處名之士、恐壞朝廷。熹迄不至。……茂良沒數年、朱熹從其子得副本讀之、則事雖恢復、而其意乃極論不可輕舉、猶平生素論也、深爲之歎息云。……

「着一冊」の「着」は、現代語の「帶有」に同じ。

なお、本條では、「且云」以下を、「又曰」「答曰」とは異なる「云」という語を用いていることから龔實之の言として譯出したが、ここを朱子の評語として讀むことも、可能であろう。「聖賢」と「日月」を對比的に述べる例としては、『論語』



子張篇の「君子之過也、如日月之食焉、過也」や、同篇の「仲尼日月也、無得而踰焉」が擧げられる。

82 因僉出文字、偶失僉子、遂不能記。云、舊有人老不識字、然隔年瑣瑣出入、皆心記口數之。既爲寫下、覆之無差。蓋其人忠寔、又專一無他事、所以記得。今學者不能記、又往往只靠著筆墨文字、所以愈忘之也。方。

文章を検出しようとしたが、たまたま短冊を無くしてしまつて、思い出せなかつた。そこでおっしゃるには、「昔、目に一丁字無い人がいたが、前の年の細かい出納を、すべて暗記しそらんじていた。書き出しておいて、もう一度復唱させてみても違ひはなかつた。たぶん、その人はまじめで、そのことに餘念なく打ち込んだので、憶えることができたのだ。今の學ぶ者は憶えられないと、すぐ筆記に頼るので、いよいよ忘れてしまふのだ。」楊方記す

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

朝鮮刊本 忠寔↓忠實

(注) 「僉子」は「簽子」に同じで、文字を記す札のこと。「簽子」の『語類』での用例としては、「先生至嶽麓書院、抽簽子、請兩士人講大學、語意皆不分明」(『外任』一〇六・285c)があ

るが、この場合は「くじ」を意味する。

「隔年」は去年の古い曆を指す「隔年曆」という語を連想すればわかるように、去年のことをいう。

「數」は「誦」に同じ。上篇60・61條の注を参照のこと。

「出入」は、收支のこと。用例は古くから見えるが、『漢書』王陵傳の「天下錢數一歲出入幾何」は分かりやすい例であろう。本條で述べられる、記録に頼ることと同種の弊害を論ずる條としては、上篇66・67條に、寫本を作らずに印刷された本を用いるようになってから學問が衰微したという言が見える。

83 先生戲引禪語云、一僧與人讀碑、云、賢讀者、總是字、某讀者、總是禪。滄山作一書戒僧家整齊。有一川僧最羸苴、讀此書、云、似都是說我。善財五十三處見善知識、聞皆如一、云、我已發三藐三菩提心、而未知如何行菩薩行、成菩薩道。

先生がたわむれに禪のことばを引いておっしゃつた、「ある僧が人に碑文を讀んでやっていると、『あなたが讀めばすべて字だが、わたしが讀めばすべて禪だ』。滄山が僧侶に規律を正させようとして訓戒を書いた。ある四川出身のいたつて汚らしい僧がこの書を読み、『なんだ

かみんなわしのことみたいじゃのう」といった。善財童子は五十三カ所で善知識に出会い、いつも判で押したように、『我は已に三藐三菩提心を發すれども、未だ如何にして菩薩行を行ない、菩薩道を成すかを知らず』とたずねた。記録者名を缺く

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

朝鮮古活字本 總↓摠 瀉↓瀉

(注) 瀉山は、唐の潭州(湖南省長沙)瀉山の靈祐禪師(七七一一〜八五三)。福州長谿(福建省霞浦縣)の人。百丈懷海禪師の門下で、門弟の仰山慧寂と並んで瀉仰宗の祖とされる。『景德傳灯録』九、『宋高僧傳』一一、『祖堂集』一六、『五燈會元』九、また『大藏經』五十史傳部二に傳がある。『瀉山語録』『瀉山警策』が傳わっている。ここに引かれる瀉山禪師の話は、原據未詳。

「藹苴」の「藹」は、「藹」に同じ。大ざっぱなさま。「孟子五」(五五・1312)に、「禹塗山之會、執玉帛者萬國。當時所謂國者、如今溪洞之類。如五六十家、或百十家、各立酋長、自爲一處、都來朝王、想得禮數大段藹苴」。また、しどけなく、だらしないこと。「祖傳禪人求讚」(『大慧普覺禪師語録』一一、大正藏四七・861c)に、「藹苴全似川僧、蕭灑渾如浙客」。明・岳元聲『方言據』(『學海類篇』)に、「藹苴、人不端潔、頼取人物曰藹苴。黃魯直云、中州人謂蜀人放誕、不遵軌轍曰藹苴」。

朱子語類讀書法篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

藹苴と書くこともある。黃庭堅「五祖演禪師眞贊」(『豫章集』一四)に、「誰言川藹苴、具相三十二」。これらの例によれば、當時ことに蜀(川)の人を目して「藹苴」ということがあったらしい。

善財童子(Sudhana Sreṣṭhidāraka)は、『華嚴經』入法界品に現われる求道の菩薩。發心して、南方に求法の旅に赴き、五十三人の善知識(人を正しい佛教の道理に導く高德者)を歴訪して教えを請い、最後に普賢菩薩に出會って、法界に入ることとを願うに至る。善財童子の旅は、佛道修行の段階を示すものとされる。朱熹が引用する善財童子のことばは、入法界品にくり返し現われるが、次はその一例。「爾時善財童子、入普莊嚴園、周遍觀察、見休捨優婆夷、坐於妙座、往詣其所、頂禮其足、遶無數匝。白言、聖者、我已先發阿耨多羅三藐三菩提心、而未知菩薩云何學菩薩行、云何修菩薩道」(八十卷本『華嚴經』六四、大正藏一〇・343c)。「語類」では、以下の箇所でも善財童子について言及される。「爲是言者、曾不如佛家善財童子曰、我已發菩提心、行何行而作佛」(『訓門人六』一一八・283b)。「他説治生產業、皆與實相不違背云云、如善財童子五十三參、以至神鬼神仙士農工商技藝、都在他性中」(『釋氏』一一六・3023)。

「三藐三菩提」は、anuttarā samyaksaṃbodhiの音寫である。「阿耨多羅三藐三菩提」のことで、無上等正覺、無上正遍知などと意譯され、この上ない完全な悟りの意。

84 問讀諸經之法。曰、亦無法、只是虛心平讀去。淳。以下讀諸經法。

諸經を讀む方法を問うと、おっしゃった。「方法なんてない。ひたすら虚心に落ちついて讀み進んでいくことだ。」陳淳記す（以下諸經を讀む方法について）

（校勘）朝鮮古寫本 淳（記錄者名）↓淳、義剛同

朝鮮古活字本 問讀諸經↓問諸讀經

（注）「平讀」は、心を落ちつかせて讀むこと。

『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に、「陳安卿問、讀諸經之法。先生曰、無法。只是刷靜了那心後、平看去。若不曉得、又且放下、待他意思好時、又將來看」とあるのが本條に該當する。「陳安卿」は本條の記錄者陳淳の字である。

85 學不可躐等、不可草率、徒費心力。須依次序、如法理會。一經通熟、他書亦易看。闕祖。

學問は順序を抜かしてはいけないし、おおよざっぱでもいけない。それでは心力を浪費するだけだ。必ず順序を守り、決まりどおり取り組むこと。一つの經に精通すれば、他の書も分かりやすくなる。李闕祖記す

（注）「躐等」は、順序をとばすことであるが、本條のこのこ

とばは、「禮記」學記の「幼者聽而弗問、學不躐等也」を踏まえる。

「草率」は、いい加減でおおよざっぱなこと。「經書須逐句理會、至如史書易曉、只看大綱、如何。曰、較之經書不同、然亦自是草率不得。」（周子之書 通書「九四・26」）や「謂器之看詩、病於草率」（「自論爲學工夫」一〇四・2613）などの用例がある。

「徒費心力」は、下篇27條に既出の「枉費心力」と同義で、精力を虚しく費やすこと。

（記錄者）李闕祖 字は守約、邵武軍光澤縣の人。『師事年攷續』313。

86 聖人千言萬語、只是說箇當然之理。恐人不曉、又筆之於書。自書契以來、二典三謨伊尹武王箕子周公孔孟都只是如此、可謂盡矣。只就文字問求之、句句皆是。做得一分、便是一分工夫、非茫然不可測也、但患人不子細求索之耳。須要思量聖人之言是說箇甚麼、要將何用。若只讀過便休、何必讀。明作。

聖人の千言萬語は、もっぱら一つの當然の理を説いたものである。人がわからないのをおそれて、さらに書物に著したのだ。文字ができて以來、二典・三謨・伊尹・武王・

箕子・周公・孔子・孟子のことばなどすべてそうであり、道理は盡くされているといえよう。文章の中に求めていけば、一句一句みな道理だ。一分を得るには、一分の努力、漠然として見通しがつかぬはずはない。ただ人が細心に探求しようとしないうのが問題だ。聖人のことばが何をいわんとし、自分は何に役立てようとしているかをよく考えること。讀んだらおしまいというのでは、讀む必要はない。周明作記す

(校勘) 朝鮮古寫本 「周公」の二文字缺

(注) 「聖人千言萬語」は、『二程遺書』一の次のことばが多分に意識されていよう。「聖賢千言萬語、只是欲人將已放之心約之使反復入身來、自能尋向上去、下學而上達也」。また『近思錄』存養篇にも見える。「學六 持守」(一一・203)では、明道のことばとして引かれ、「孟子九 告子上」(五九・141)~143)にはこの「聖賢千言萬語」をめぐる議論が數條にわたって展開されているように、朱熹の學問論で大きな意味を持つ。「總論爲學之方」(八・13)にも、「聖賢千言萬語、教人且從近處做去」と見える。さらに程伊川「答朱長文書」(また『近思錄』爲學大要篇)の次のことばも、この條での朱熹の主張に基本的に合致するものといえよう。「聖賢之言、不得已也。蓋

朱子語類讀書法篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

有是言、則是理明、無是言、則天下之理有闕焉。如彼耒耜陶冶之器、一不制、則生人之道有不足矣。聖賢之言、雖欲已、得乎」。一方、『語類』でのこの語は「一理」つまり唯一絶對の道理に對比させて用いられていることが多い。「論語二十三 顏淵篇上」(四一・1043)には、本條と同じ周明作の筆記で「且如聖賢千言萬語、雖不同、都只是說這道理」という語が見える。

「二典」は、『尚書』の堯典・舜典。三謨は、同じく大禹謨・皋陶謨・益稷謨。二典・三謨から孔・孟に至るまでは、儒學のいわゆる道統をいう。朱熹「中庸序」に、「夫堯・舜・禹、天下之大聖也。以天下相傳、天下之大事也。以天下之大聖、行天下之大事、而其授受之際、丁寧告戒、不過如此。則天下之理、豈有以加於此哉。自是以來、聖聖相承、若成湯・文・武之爲君、皋陶・伊・傅・周・召之爲臣、既皆以此而接夫道統之傳、若吾夫子、則雖不得其位、而所以繼往聖、開來學、其功反有賢於堯舜者」。

また「可謂盡矣」は、「中庸序」に、「堯之一言、至矣盡矣」とあるのを連想させる。

本條の末尾をさらに簡潔にした内容の言が、『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に、「大抵讀書、須要看那道理是作何用。若只讀過便休、何必讀」と見える。

87 讀六經時、只如未有六經、只就自家身上討道理、其理便易曉。敬仲。

六經を讀むときには、六經がまだ存在しないかのようにして、ひたすら自分の身に引きつけて道理を求めめるようにすれば、道理は分かりやすくなる。游敬仲記す

(注) 『朱子讀書法』卷二「虚心涵泳」に、本條とほぼ同じ言が次のように見える。「讀六經、只就自家身上討道理、便易曉。」なお、當該箇所直後には、前條に引いた語句が見える。

88 讀書只就一直道理看、剖析自分曉、不必去偏曲處看。

易有箇陰陽、詩有箇邪正、書有箇治亂、皆是一直路徑、可見別無峣崎。寓。

書物を讀むには、とにかくひとすじの道理にもとづいて讀み、解きほぐしていけば、おのずから明らかになるのだから、ことさらわかりにくいところについて讀む必要はない。『易』は陰陽を説き、『詩』は邪正を説き、『書』は治亂を説いており、すべてみなまっすぐな筋道で、曲がりくねったところなど何もない。徐寓記す

(注) 「易有箇陰陽」以下に關連する發言を『語類』中に探すと、次のような例が擧げられる。

易字義只是陰陽。「易一 綱領上之上」六五・1005)

只是「思無邪」一句好、不是一部詩皆「思無邪」。「詩一

綱領」八十・2063)

或問讀尙書。曰、不如且讀大學。若尙書、却只說治國平天下許多事較詳。(尙書一 綱領」七八・1982)

「剖析」は、分析し解きほぐすこと。「後面傳又立八件、詳細剖析八件意思」(大學二 經下」一五・308)などの用例が見える。

「峣崎」は、下篇33條の注を参照されたい。

「偏曲」は、込み入って分かりにくいことをいうが、古くは『荀子』正論に「上偏曲則下比周矣」とあるように、不公正であることを表わす。

なお、本條と相通ずる言として、下篇54條の「凡讀書、且須從一條正路直去」が擧げられる。

89 人惟有私意、聖賢所以留千言萬語、以掃滌人私意、使人人全得惻隱、羞惡之心。六經不作可也、裏面着一點私意不得。節。

人には私意というものがあるから、聖賢は千言萬語の教えを遺して、その私意を拭い去り、一人一人に惻隱や羞惡の心を身につけさせようとした。六經は書かれなくてもよかったが、人の心にほんのちょっとの私意もあってはいけないのだ。甘節記す

(注) 「惻隱、羞惡之心」は、いうまでもなく、『孟子』公孫丑上の「孟子曰、人皆有不忍人之心。……惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也」を踏まえる。

「掃滌」は、一掃する、拂拭するの意。學ぶには、先入見を洗い流さねばならない、という主張は、この下篇73條から75條に既に見られたものである。

90 許多道理、孔子恁地說一番、孟子恁地說一番、子思又恁地說一番、都恁地懸空掛在那裏。自家須自去體認、始得賀孫。

多くの道理は、孔子がこういい、孟子がこういい、子思がこういっていても、そのままではみな宙にぶら下がっているようなものだ。それらを自分で體得しようとしてこそ意味がある。葉賀孫記す

(注) 「懸空」は、上篇51條に既出。本條と同様、道理はしっかり身に引き寄せ根づかせない限り空虚なままであることを述べた箇所としては、「學七 力行」(二三・223)の「若不去實踏過、却懸空妄想、便和最下低層不會理會得」が挙げられる。

91 爲學須是先立大本。其初甚約、中間一節甚廣大、到末

朱子語類讀書法篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

梢又約。孟子曰、「博學而詳說之、將以反說約也」。故必先觀論孟大學中庸、以考聖賢之意。讀史、以考存亡治亂之迹。讀諸子百家、以見其駁雜之病。其節目自有次序、不可踰越。近日學者多喜從約、而不於博求之。不知不求於博、何以考驗其約。如某人好約、今只做得一僧、了得一身。又有專於博上求之、而不反其約、今日考一制度、明日又考一制度、空於用處作工夫、其病又甚於約而不博者。要之、均是無益可學。

學問するには、まず大本を立てること。學問の道ははじめはごく簡約で、真ん中あたりで廣大になり、終わりの方はまた簡約になる。孟子は、「博學にして之を詳說するは、將に以て反つて約を說かんとすればなり」という。だから、まず『論語』『孟子』『大學』『中庸』を読んで、聖賢の心を考え、次に史書を読んで存亡治亂の跡を考え、さらに諸子百家を読んで、その雜駁の弊害を見極めねばならない。この項目立てにはおのずと順序があつて、飛び越えてはいけないのだ。近頃の學ぶ者は、たいいてい簡約を好んで、博く學ぼうとしない。博く學ぼうとせずに、簡約の何たるかが

わかるうか。あんなに簡約が好きだった誰かさんは、出家してわが身ひとつの道理を悟っているわさ。また逆に、ひたすら博く學ぶばかりで、簡約に戻ることでもできず、今日一つの制度について調べたかと思えば、明日は別の制度について考えるような人もいる。役立てようとはかりに無駄な努力を費やして、その弊害は、簡約だけで博く學ばない人よりも一層ひどい。つまり兩方ともだめなのだ。鄭可學記す

(校勘) 朝鮮古活字本 考驗↓考驗

朝鮮古寫本 踰越↓越過 考驗↓考驗 空於用處↓空於無用

處

(注) 『孟子』の引用は、離婁篇下の「孟子曰、博學而詳說之、將以反說約也」。博と約を對比させて捉える考え方は、『論語』雍也の「博學於文、約之以禮」や子罕の「博我以文、約我以禮」に代表される。この二項に關する議論を『語類』の中から一つ挙げておく。

問、博學而詳說之、將以反說約也、如何。曰、約自博中來。既博學、又詳說、講貫得直是精確、將來臨事自有箇頭緒。才有頭緒、便見簡約。若是平日講貫得不詳悉、及至臨事只覺得千頭萬緒、更理會不下、如此則豈得爲約。(孟子七 離婁下) 五七・324b~40)

いわゆる四書を、ここでは論語・孟子・大學・中庸の順に配

置しているが、四書の讀むべき順序は大學・論語・孟子・中庸であること、「大學」・綱領」の冒頭で再三にわたって説かれる。また『語類』で四書を論じた篇の次序もこの通りであることにも注意されたい。

學問須以大學爲先、次論語、次孟子、次中庸。(一四・299)  
 某要人先讀大學、以定其規模、次讀論語、以立其根本、次讀孟子、以觀其發越、次讀中庸、以求古人之微妙處。大學一篇有等級次第、總作一處、易曉、宜先看。論語却實、但言語散見、初看亦難。孟子有感激與發人心處。中庸亦難讀、看三書後、方宜讀之。(同)

先看大學、次語・孟、次中庸。(同)

「駁雜」の語が諸子の書を評する語として用いられるが、「戰國漢唐諸子」には、「家語雖記得不純、却是當時書」(一三七・325)、  
 「管子之書雜」(同)、「賈誼之學雜。他本是戰國縱橫之學、只是較近道理、不至如儀・秦・蔡・范之甚爾」(同・327)など、近似する批評が見える。

「用處」は、實用の場を指す。朝鮮古寫本は「空於無用處」に作っており、それによれば「役に立たぬところに無駄な努力を費す」の意になる。

本條では、「某人」をある人と解釋したが、あるいは、批判の對象として、かなり具體的な實名がそもそも入っていた可能性があるのではないかと考える。もちろん「誰か」を特定することはできない。また、「某人」を一人稱の語として理解する

こともでき、その場合は、「もしわたしが簡約の一點張りであったなら、いまごろは僧にでもなつてわが身一つの道理を悟ろうとしているわい」というような譯にならう。

92 學者只是要熟、工夫純一而已。讀時熟、看時熟、玩味時熟。如孟子詩書、全在讀時工夫。孟子每章說了、又自解了。蓋他直要說得盡方住、其言一大片、故後來老蘇亦拖他來做文章說。須熟讀之、便得其味。今觀詩、既未寫得傳、且除了小序而讀之。亦不要將做好底看、亦不要將做惡底看、只認本文語意、亦須得八九。營。

學ぶ者はじっくりとひたむきに努力すること。口に出して讀むにも、考えて讀むにも、味わつて讀むにもじっくりやる。『孟子』『詩』『書』などは、すべて讀むときの努力にかかっている。孟子は各章で、説きながら自分で解説している。彼はいいたいことをいい盡くしてようやく止むから、そのことが大きな塊になっている。だから後に老蘇はそいつをもつてきて文章を書いたのだ。熟讀してこそ味わいがわかる。いま『詩』を讀むのに、毛傳も書かれていない状態で、小序などは取っぱらつてよむこと。良いもの

朱子語類讀書法篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

として讀まなくてもよいし、悪いものとして讀むこともない。ひたすら本文の語意にそつていけば、八九割がたはわかるものだ。黄營記す

(校勘) 朝鮮古活字本 「老蘇亦拖他來」の他と來の間に空格有り。

朝鮮古寫本 拖↓把

(注) 本條で述べる讀み方、『孟子』は熟讀すべし、『詩』は小序などは無視すべし、と同趣旨の訓語を説いた箇所を以下に列擧する。『書』に關しては、ふさわしい例が今のところ見當らない。

孟子要熟讀、論語却費思索。孟子熟讀易見、蓋緣是它有許多答問發揚。(論語一 語孟綱領)十九・433)

看孟子、與論語不同、論語要冷看、孟子要熟讀。論語逐文

逐意各是一義、故用子細靜觀。孟子成大段、首尾通貫、熟讀文義自見、不可不逐一句一字上理會也。(同)

詩小序全不可信。(詩一 綱領)一八〇・2074)

問、詩傳甚撤去小序、何也。曰、……某由此見得小序大故是後世陋儒所作。(詩一 綱領)一八〇・2073)

今欲觀詩、不若且置小序及舊說、只將元詩虚心熟讀、徐徐玩味、候彷彿見箇詩人本意、却從此推尋將去、方見感發。

……某向作詩解、文字初用小序、至解不行處、亦曲爲之說。後來覺得不安、第二次解者、雖存小序、問爲辨破、然



終是不見詩人本意。後來方知、只盡去小序、便可通。於是盡滌舊說、詩意方法。(「詩一 論讀詩」一八〇・2085)

學者當與於詩。須先去了小序、只將本文熟讀玩味、仍不可先看諸家注解。看得久之、自然認得此詩是說箇甚事。(「詩一 論讀詩」一八〇・2085)

蘇洵の逸話は、彼の「上歐陽內翰第一書」に見える。上篇65條の注を参照のこと。

なお、本條の冒頭から蘇洵の引用を経て「便得其味」までと同じ言が、『朱子讀書法』卷三「熟讀精思」に見える。

93 人做功課者不專一、東看西看、則此心先已散漫了、如何看得道理出。須是看論語、專只看論語、看孟子、專只看孟子。讀這一章、更不看後章、讀這一句、更不得看後句。這一字理會未得、更不得看字。如此、則專一而功可成。若所看不一、汎濫無統、雖卒歲窮年、無有透徹之期。某舊時文字、只是守此拙法、以至於今。思之、只有此法、更無他法。憫。

勉強する時に、集中しないで、あれこれよそ見をしているようでは、この心がまず散漫になってしまい、道理など理解のしようがない。『論語』を読むなら、ひたすら『論

語』、『孟子』ならひたすら『孟子』をよむこと。この一章を讀んでいる時には、次の章は讀んではいかんし、この一句を讀んでいる時には、次の句は讀んではいかん。この一字がわからないうちに、次の字は讀んではならん。こうすれば、集中できて努力が實を結ぶのだ。あれこれとりとめなく讀んでいったのでは、いくら年期をかけても、すっきりわかる時はあるまい。わたしは昔から讀書に際して、ただこの愚直な方法を守って、これまでやってきた。いま考えても、やはりこの方法だけで、他にはない。沈憫記す

(注) 「散漫」は、けじめのない様を形容する語である。例えば、朱子は「理氣下 天下」(二・31)で治水を論じ、「漢人之策、令兩旁不立城邑、不置民居、存留些地步與他、不與他爭、放教他寬、教他水散漫、或流從這邊、或流從那邊、不似而今作堤去圩他。」という。また本條と同じように、心の状態を形容する例も多く、「此心散漫放肆、打一響動時、便在這裏、能使得多少力」(「論語八 里仁篇上」二六・95c)や、「諸友只有簡學之意、都散漫、不恁地勇猛、恐度了日子」(「朱子十八訓門人九」一一一・292d)など。

「汎濫」は、上篇62條、下篇45條に既出。「守此拙法」からは、陶淵明「歸園田居」の「開荒南野際、

守拙歸園田」の句が思い起こされる。巧拙を問題にせず、愚直に取り組むこと。

「功課」は、古く『韓非子』に見えるが、それは功績を顯彰する意味で用いられており、本條のように、毎日の學習という意味での用法は、恐らくは佛家での日課、日々のお勤めとしての「功課」に由來するであろう。

94 凡讀書、須有次序。且如一章三句、先理會上一句、待通透、次理會第二句、第三句、待分曉、然後將全章反覆袖釋玩味。如未通透、却看前輩講解、更第二番讀過。須見得身分上有長進處、方爲有益。如語孟一書、若使恁地讀過、只一二日可了。若要將來做切己事玩味體察、一日多看得數段、或一兩段耳。又云、看講解、不可專徇他說、不求是非、便道前賢言語皆的當。如遺書中語、豈無過當失實處、亦有說不及處。又云、初看時便先斷己以意、前聖之說皆不可入。此正當今學者之病、不可不知。寓。

「書物を讀むのには順序がある。例えば、一章三句であれば、まず最初の一句に取り組み、すっかり理解できてから第二句第三句に取り組み、それがよくわかってから、全體を繰り返し反芻し味わうのだ。もしまだわからなければ、

朱子語類讀書法篇譯注 (四) (興膳・木津・齋藤)

先人の注解を讀んで、またもう一度讀む。自分の身に大きく進歩したところがわかってこそ、役に立つ。『論語』『孟子』などは、そんなふうに讀みとばすのなら、一日二日で足りるだろう。しかし、わが身に引きつけて深く味わい體得しようとするなら、一日にせいせい數段、場合によれば一二段讀めればいいところだ。」さらにおっしゃった。

「注解を讀むにも、全面的にその說に従って、是非を追究せず、先賢のことはみな正しいなどといってはいけない。程先生の『遺書』の中の語にしても、妥當でないところもないわけじゃないし、不十分なところだってある。」また、次のようにもおっしゃった。「始めて讀むときに、自分の考えで先に斷定してしまうと、先賢の說は何も入ってこなくなる。これこそいまの學ぶ者の惡弊であり、よくわきまえておかねばならない。」徐寓記す

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

朝鮮古活字本 專徇他說↓專徇他說

(注) 「體察」は、下篇の21條を参照のこと。

「徇」は古活字本で作るとおり「徇」であろう。

「一章三句」は、經書一般の文章を指すのであろうが、直接

的には、「葛覃三章章六句」や「桃夭三章章四句」など、『詩』の構成を思わせる言い方である。

「抽釋」は、上篇49條の注を参照のこと。

「的當」は適切なこと。「總論爲學之方」(八・10)にも、「或問、爲學如何做工夫。曰、不過是切己、便的當」とある。

「講解」は、學問を説き講じることであるが、「看講解」というふうには、讀まれるものとして用いているからには、例として挙げられる『程氏遺書』などの語録の類の書物を指すのではないかと考えられる。

なお、一段づつこつこつ進まねばならない、という前條および本條の主張は、上篇48條以下で集中的に論じられている。

『朱子讀書法』の類目では「循序漸進」に分類できる。

95 人只讀一書不得、謂其傍出多事。禮記左傳最不可不讀揚。

人は、一つの書を読みきれないと、いろいろなことが出てくるのだなどという。『禮記』『左傳』は何より讀まないわけにはいかない。包揚記す

(注) 『禮記』『左傳』は、經書の中でも大部な「大經」であり、まさしく「傍出多事」の内容であるといつてよい。朱子は、この「大經」を擧げて、學習項目が膨大であることを敬遠

しようとする向きを戒めている。「春秋 綱領」(八三・25)でも、朱子は「左傳一部載許多事、未知是與不是。但道理亦是如此、今且把來參考」と述べ、記事の雜多さを認めた上で、やはり學ばねばならぬことを説いている。

96 看經書與看史書不同。史是皮外物事、沒緊要、可以割記問人。若是經書有疑、這箇是切己病痛。如人負痛在身、欲斯須忘去而不可得。豈可比之看史、遇有疑則記之紙邪。個。

經書を讀むのと史書を讀むのとは違う。史書は外的な事柄を扱っていて、大したことではないから、メモを取って人に聞けばよい。しかし、經書を讀んで疑問が生じれば、これはわが身にとって切實な痛みだ。人は自分のからだに痛みがあれば、しばし忘れようとしてもできないものだ。史書を讀むのに、疑問が生じたら紙に書いておけばよいのとくらべものになろうか。沈僊記す

(校勘) 朝鮮古寫本 遇有↓過有  
(注) 「皮外物事」は、外面的な現象として現れることがらをいう。

「斯須」は「須臾」と同じく、ごく短い時間のこと。「只變

易顔色亦得、但覺說得太淺。斯須之間、人誰不能、未知他果有誠敬之心否。……」〔論語三 學而篇中〕二一・500〕

「劄記」はメモを取ること。下篇130條以下に史書を讀む心得を述べる箇所が見えるが、140條で史書を讀む際メモを取ることに言及している。

97 浩曰、趙書記云、自有見後、只是看六經語孟、其他史書雜學皆不必看。其說謂買金須問賣金人、雜賣店中那得金銀、不必問也。曰、如此、即不見古今成敗、便是荊公之學。書那有不可讀者。只怕無許多心力讀得。六經是三代以上之書、曾經聖人手、全是天理。三代以下文字有得失、然而天理却在這邊自若也。要有主、覷得破、皆是學。浩。

わたくし(浩)が、「趙書記は、道理が見えてきたら、ただひたすら六經と『論語』『孟子』だけを讀み、その他の史書や雜書などはみな讀まなくてよい、といっています。これは、金を買うには金商人に聞け、雜貨屋で金銀が買えるわけではないから、聞く必要はない、ということですね。」という、いわれた。「そんなふうでは、古今の成敗の道理はわからない。それこそ、王荊公の學問だ。讀んでいけ

朱子語類讀書法篇譯注(田)(興膳・木津・齋藤)

ない書物などあろうか。ただそんなにたくさん讀めるほどの力がないのじゃないか。六經は三代以前の書物で、聖人の手を經ているから、すべて天の理である。三代以下の文章には得失があるが、天の理は、そこにそのまま存している。ちゃんと主體性をもって見抜くことができれば、すべて學問なのだ。」邵浩記す

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「趙書記」が誰を指すかは不明。『語類』において「趙書記」の名稱は本條を含め、卷四「性理一 人物之性氣質之性」および卷六二「中庸一 綱領」の計三カ所に見えるが、そのすべてが同じ邵(郭)浩の筆記によるものである。それにより恐らく彼と同時期に朱子に師事した者と思われるが、「書記」と稱しうる人物は見當たらぬ。

本條で「史書」と並稱される「雜學」は、具體的には諸子の書などを指すのであろう。前出の91條でやはり諸子の書が「雜駁」と評されているのに通ずる考え方である。

「荊公」は、王安石のこと。「本朝四 自熙寧至靖康用人」(一三〇・305~3103)では、王安石の人物・學問を繰り返して論じるが、全體的にはあまり好意的評價はしていないものの、後世のように完全に否定し去るのではなく、彼の思想行動に見るべきところがないではないが、見識が狭く、道理の究明が不

徹底で力量が伴わない、という類の評が目立つ。

「只怕」は推量の意。「恐怕」に同じ。

「三代」以降の文章を読むことについては、「訓門人」(一三・2740)でも、「三代以下書、古今世變治亂存亡、皆當理會」と見える。

(記録者) 邵浩(郭浩) 不明。『師事年攷』173。『宋元學案』補遺卷六九は郭浩の誤りとする。

98 向時有一截學者、貪多務得、要讀周禮、諸史、本朝典故、一向盡要理會得許多沒緊要底工夫、少刻身己都自恁地顛倒倒沒頓放處。如喫物事相似、將甚麼雜物事、不是時節、一頓都喫了、便被他撐腸拄肚、沒奈何他。賀孫。

むかし、欲張って『周禮』や諸史、本朝典故すべてを讀もうとした書生たちがいて、大切でもないことにただもう精力を費やしたあげく、やがて、自分自身もそんな風にあつちにふらふらこつちにふらふらして、落ちつくところを失ってしまった。ものを食べるのと同じで、何やかやの雑多なものを、時節もわきまえず、一氣に食べれば、腹が突っ張って、どうしようもなくなるだけだ。葉賀孫記す

(注) 「截」は量詞。一まとまりのものを指す。「性理 三仁

義禮智等名義」(六・106)に「仁與義是柔軟底、禮智是堅實底。仁義是頭、禮智是尾。一似說春秋冬夏相似、仁義是陽底、一截、禮智是陰底、一截」とあるのが参考になる。

「顛倒倒」はどっちつかずの状態をいう語。「初看、惻隱便是仁、若恁地殘賊、便是不仁。羞惡是義、若無廉恥便是不義。辭遜是禮、若恁地爭奪、便是無禮。是非是知、若恁地顛倒倒、便是不知。」(孟子三 公孫丑上之下)五三・1282)などの用例がある。

「撐腸拄肚」は腹に突っ張るの意で、學問が消化不良である「一截學者」を形容する。同様な用法のものでは、胡宏(胡五峰)一派を評した「毅而不弘、如胡氏門人、都恁地撐腸拄肚、少問都沒頓著處」(論語十七 泰伯篇「三五・929)や、陳傅良への「至如君舉胸中有一部周禮、都撐腸拄肚、頓著不得」(陳君舉「一二三・2960)など、ともに本條と同じ葉賀孫によって記録されている。上篇40條、43條は、欲張って多くを讀もうとする「貪多」の弊害と、己の力を見きわめて讀書することの重要性を主張している點で本條と共通する。

本條では、『周禮』と史書、典禮制度が並列されているが、『周禮』は、それが官の職掌を述べる點で結びつけられたのである。『周禮』に關する朱子の考え方は、「禮三 周禮總論」(八五・2203)で、『周禮』とは何か」と問われ、「不敢教人學。非是不可學、亦非是不當學。只爲學有先後、先須理會自家身心合做底、學周禮却是後一截事」とあるように、初學がまず

學ぶべき必修の學問と考へてはいなかつたことがわかる。

99 看經傳有不可曉處、且要旁通。待其決治、則當觸類而可通矣。人傑。

經傳を讀んでわからないところがあれば、とにかく全體から廣く理解するようにすること。理解がすみずみまで行き渡れば、そこから何でもわかるようになる。萬人傑記す

(注) 「觸類旁通」は、『易』繫辭上「引而申之、觸類而長之」、乾「六交發揮、旁通情也」に基づくが、ここでは、「いたるところ」という意で用いられる「觸地」「觸處」などの口語語彙の用法を斟酌し、「あらゆるもの」の意に譯出した。

100 經旨要子細看上下文義、名數制度之類、略知之便得、不必大段深泥、以妨學問。

經の本旨は、子細に前後の文義を讀み込まねばならないが、名數制度の類は、ひととおりの知識を得ればよいのであり、深入りして學問の妨げにならぬようにすること。記録者名を缺く。

(注) 「深泥」の「泥」は「なずむ」の意で、去聲に讀まれる。

譯注者後記 本稿作成の過程で、濱田麻矢、吉川雅之、高塚あゆみ、多田伊織の諸君による譯注の草稿を参照した。謝意を表する。